

いた時の感激が夜毎に勇士の胸に甦る。雲井遙かに掛る月を眺めると、一条の雁が飛ぶ。そぞろに思う故郷の山河も最早生きて見られないだろうと。

その後幾多の激戦、小戦闘、追撃戦の後、十一月二十九日午前十時道下隊は常州に進入し、その後も会心の攻撃を続け凱歌を奏す。この街は遠く千五百年の昔、仏道を極めるため支那を訪れた僧空海、弘法大師の修業の霊地であり天寧寺の大伽藍が聳えている。

焦山砲台の攻撃命令により第二大隊は鎮江を出発、焦山砲台を攻略し、揚子江の航行権を確保する。

昭和十三年一月十四日揚州城を後に首都大南京城に連隊旗を先頭に堂々の入城、勇士の目には感激の涙が溢れる。護国の鬼と化した戦友よ、我らとともにこの喜びを分けあってくれ。

## 洋菁墟の戦争

香川県 田中 優

不寝番に起こされて、目をこすりながら何事かと聞けば、大隊本部よりの電話連絡で電話線を切断されたので、直ちに一個分隊をもって潜伏斥候を出せとの大塚副官からの命令。

松崎軍曹以下十二人が選抜された。自分は軽機の射手であるが、宇都宮一等兵の軽機であるので弾薬手となり、宇都宮が射手で、一番は新名兵長、二番宇都宮、三番田中上等兵の順。まず完全防音装備のため地下足袋に巻脚絆、帯剣は布片を巻き軽装で中隊兵舎前に整列する。絶対に声を立てぬことなど注意伝達を聞き出発だ。時に午前三時三十五分。夜半の月はもう西に落ちて、真の闇である。絶対に音を発してはならぬので、抜き足差し足で、少し前進しては停止、前進しては停止を繰り返す。なんと今夜の静かなことか。嵐の前の静けさともいえる無

気味さである。電話線は土民が切ったものか、敵兵なのかは分からない。いずれにしても今夜はいつもと違う異常さを感じながら前進すること二十分余。前方の闇の中で何か空気の動く気配、耳をすますと、ささやきに似た人声がかすかに伝わってきた。新名兵長が「友軍か？」誰何したとたん、がやがや支那語が聞こえ、一斉に小銃で射ってきた。

我々もすぐその場に伏せて、まず宇都宮の軽機がパーンと火を吹いたがあとが出ない。とっさに故障だと思っ

て自分は無意識に軽機を手元へ引き寄せた。  
「突込故障だ」と判断して、尾頭底注柱を抜き取り鉄帽を脱ぎ、これに入れてカツソクを引き出して点検しようとしたが、暗闇と敵弾がくる中でどうにもならぬ。と、その時、新名兵長が「おい友軍がおらん。引くぞ。早く逃げ」と叫んだ。なんと我ら三人だけが残されたのだ。

軽機をかつき部品をにぎりしめたまま新名兵長の後に続いて一目散に走った。そして陣地前で大声で松崎軍曹を連呼した。陣地内の戦友は、我々三人が生還したことを知り、喜びあってくれた。

ひと休みしている時、中隊衛兵につくように命ぜられて、陣地から中隊に戻ってきた。中隊衛兵は、衛兵司令が小松兵長、歩哨係が湊兵長、表門に木村兵長、裏門に池田一等兵が立哨中であつた。

直ちに裏門の交代に池田一等兵の所へ行くと、池田一等兵は即死しており、急いで表門の木村兵長の方へ行けば、木村兵長もまた足を負傷して動けない。出血がひどい木村兵長をかかえ起こして、兵舎へ連れ帰り止血措置をした。

それから衛兵所へ以上のことを伝えようと戻ったら、今度は衛兵所が全滅していた。衛兵所の前で迫撃砲弾が炸裂したのだ。川辺上等兵は床下へ、小松兵長は湊兵長と折り重なって倒れていた。小松兵長は私に気付いてこの腕をひきちぎれと叫んだ。私は本部医務室へ報告して早く手当をしてくれるよう要請した。しかし敵の攻撃は一段と激しさを加え市内へも敵が入ってきた模様。私はただ茫然としてどうすればよいか途方にくれていた。

通信の上等兵が陣地から敵の戦車がきたと告げに来た。しかし、この有様を見てもすぐさま陣地へ戻ろうとして衛

兵所を出たとたん、小銃弾に当たってばったり路上に倒れた。すぐ抱き起こして、しっかりせよと励ましたのが、わしにかまわず戦闘してくれとの言葉を残して息を引きとった。

そうだ、早く戦車のことを報告しようと、中隊事務所へ戻ったら、ここでも青野小隊長、山崎中隊長が目と胸にそれぞれ弾丸をうけて倒れていた。それでも敵の戦車のことを報告したら中隊長は「肉薄攻撃班を編成せよ」と命令された。「だれももういません」とも答えられず「はい」と答えてその場を去った。もうこれが最後だと覚悟を決めてから落ちて着いてきた。

砲弾音もだいぶ遠のいた感じがしたとき、今度は陣地から友軍の戦車がきた、と伝令が連絡してきた。しめた、もうこれで助かった、と思った。時刻もかれこれ午後四時ごろになった。この時の戦闘で丸山中尉以下多数の犠牲者が出たうえ、田村部隊長も抜刀されて敵中へ切り込まれたのであった。

それにしても、この時ほど、この世の定めというか、前世からの因縁というか、はかり知れない運命というも

のを感じさせられたことはなかった。と同時に、戦争の悲惨さを思い知らされた。

自分は池田一等兵の位置に一刻早く行けば、また木村兵長の位置に一刻早ければ、あるいは衛兵所を出るのが一刻遅ければ、今一つ九六の軽機が三〇発出ていたら、敵の標的となっていたかも知れない。また新名兵長が引上げ時を誤れば我々の命も洋青墟の露と消えたかも知れなかったのである。

心から戦死された方々のご冥福をお祈り申し上げます。

## 私の戦中戦後

石川 梶島 喜左衛門

昭和十五年一月二十四日、臨時召集のため輜重兵第九聯隊第二中隊に編入、二等兵となる。同年二月二十九日、第三陸上輸卒隊転属のため三月二日宇品港出発、同七日塘沽港上陸、同月九日北支に到着した。

直ちに第九師団第三陸上輸卒隊に編入、同年八月一日